国語

（問題）

2014年度

〈H26081121〉

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2 問題は2～10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 マーク解答用紙記入上の注意

（1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

（2）マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	○悪い	◐悪い
マークを消す時	○良い	○悪い	◐悪い

5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。

7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

（一）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

きびしい寒さがつづいている二月はじめのころから、もうすでに日ざしは春の匂いになっている。

この「匂い」というのは艶やかさと言ってもいいし、なまめかしさと言ってもいい。また明るいひかりとか色あいと言ってもいいような気がする。

四季おりおりの自然のめぐりあいに変化があるというのは、平安朝期には[1]シイ歌の部立てになっていた。だがもう一つの特色は、[A]のあいだに半分くらいずつ季節のずれがあるということだった。

地上では厳冬の寒さが身にこたえているのに、空を見上げると日ざしが春の明るさと艶やかさに溢れはじめている。

街中であれ野原であれ、地上を歩いていると、あまりの寒さに身を縮め身体を固くしているのに、ふと晴れた空を眺めるともう春だなと感じて、救われたような[2]カイ放された気分になれる。

暦のうえの[B]は、まだきびしい寒さだ。これは旧暦になぞらえてもおなじことだ。シイ歌もまたこの[A]の季節感のずれを「[C]」と歌っている。

少し年齢をくってきたので実感でわかる気がするのだが、これは暗い寒い厳冬の感じをできるだけ味わうまいとする中世以来のわたしたちの知慧のような気がする。だが、もしこれを天[3]ネンの知慧とみれば、モンスーン地帯に与えられた特権だとも言えよう。

こんなことをすこし地道にかんがえるようになったのは、ほかでもない、ここ一年ばかりのあいだ、「匂い」に少し凝ってきたからだ。

ざっと大ざっぱになら気がついていたが、甲日本の古典シイ歌や近代シイ歌の世界では、「匂い」という言葉で、香りのことだけではなく、光線の具合、色彩や色調までをあらわしている。さらに「匂い」という言葉に凝って少しだけ調べてみると、それだけではなく、味とか音とか人の音声にまで、「匂い」という言葉が使われているので驚いた。

さっそく、わたしの[D]が頭をもたげて、その理由を考えてみた。

その一つは人間がまだ魚類であった時代にさかのぼる。

鼻先をかすめてゆく水の流れと速さの[E]、鰓呼吸のときに吐き出したり、吸いこんだりする水の匂い（これはほんとの匂い）や味や温度、これが「匂い」の起源だとかんがえれば「匂い」という言葉で色調や光線や物音の響きや雰[4]イ気のようなものまで含めるということも意味が通じるというように説明できるのではないだろうか。

インド・ヨーロッパ語でもおなじことが成立するかどうかわたしに知識がない。だが「匂い」という言葉で、五感のすべてを指そうとして「匂い」の起源を保存している民族語は悪くないとおもった。

もう一つは、必然的に「匂い」という言葉の語源はなにかを考えたり調べたりした。

うろ覚えだが「島の榛原　にほひこそ」という歌が『万葉集』にあったとおもう。それなら万葉時代にはすでにこの言葉は使われてあったに違いない。

わたしが狙いをつけたのは折口信夫だった。この学者は古典語学者としても、もっとも注目に値する人だからだ。すると、乙あった、あった。流石だねと驚き、そして喜んだ。

折口説では「匂ふ」は、「青丹よし」という「[F]」につく枕詞や「丹土」（硫化水銀を含んだ赤色の土）とかいう言葉の「丹」からきている。わたしの勝手な評釈だが、〈赤く色づいている〉という場合、「丹ふ」というように「丹」を[G]化すればいい。ところがこれは語音のうえから「丹ほふ」（丹色にされる）のように受動態にした方が楽になる。

この「丹ほふ」が「匂ふ」の語源だというのが折口説の要にあたっている。すると、何はともあれ、「匂う」は色彩とか色調の呼称からはじまったことになる。

わたしにも思い当ることがある。以前に「白遠ほふ」という『常陸風土記』(注)の「新治」につく枕詞を探ったことがあった。その経緯ははぶくが、この場合、「白遠き」という言い方でよいはずなのに「遠ほふ」という使い方をしている。だとすれば、「丹ふ」（赤く色づく）というのを「丹ほふ」と言い廻すことは、あっていいとおもえた。

寒冷のなかで、いま春は匂っている。

（吉本隆明「春の匂い」より）

注　『常陸風土記』……八世紀初頭に作られた常陸の国（現在の茨城県の一部）の地誌。

問一　傍線部1～4にあたる漢字がカタカナ部分に使われている語をそれぞれ次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

1　ア　シ怨　イ　シイ逆　ウ　シ虐　エ　シイ茸　オ　シ碑
2　ア　展カイ　イ　カイ謔　ウ　誤カイ　エ　カイ方　オ　視カイ
3　ア　観ネン　イ　釈ゼン　ウ　ネン料　エ　座ゼン　オ　ネン土
4　ア　胸イ　イ　拘束イ　ウ　イ度　エ　イ心地　オ　イ怖

問二　空欄 A に入るもっとも適当な対語を次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　海と空　イ　街中と野原　ウ　人と自然　エ　山と里　オ　天と地

問三　空欄 B 、空欄 D ～ G に入るもっとも適当な語句をそれぞれ次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

B　ア　如月　イ　春分　ウ　啓蟄（けいちつ）　エ　立春　オ　彼岸
D　ア　疑心暗鬼　イ　向学心　ウ　雑学趣味　エ　天の邪鬼（あまのじゃく）　オ　理論癖
E　ア　反応　イ　触覚　ウ　嗅覚　エ　感覚　オ　干渉
F　ア　難波　イ　出雲　ウ　奈良　エ　大津　オ　信濃
G　ア　枕詞　イ　形容詞　ウ　副詞　エ　動詞　オ　固有名詞

問四　空欄 C に入る歌の一部の引用としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　年の内に春はきにけり　イ　花の色は移りにけりな　ウ　春すぎて夏来にけらし
エ　夏の夜はまだ宵ながら　オ　忍ぶれど色に出でにけり

問五　傍線部甲「日本の古典シイ歌や近代シイ歌の世界では、「匂い」という言葉で、香りのことだけではなく、光線の具合、色彩や色調までをあらわしている」という指摘に合致する古典と近代のシイ歌の例を次のア～カから二つ選び、その解答欄にマークせよ。

ア　東風（こち）吹かばにほひおこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ
イ　潮風に君のにおいがふいに舞う抱き寄せられて貝殻になる
ウ　時雨（しぐれ）の雨間なくな降りそ紅（くれなゐ）ににほへる山の散らまく惜しも
エ　ガス弾の匂い残れる黒髪を洗い梳（す）かして君に遭いゆく
オ　なお見よと花橘（たちばな）やにほふらん昔の夢の短か夜の空
カ　菜の花の畑を出でしほのかなる夕べの月はなのはなのにほひ

問六　傍線部乙の「あった、あった」は何があったのか。もっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　『万葉集』の「匂い」の用例
イ　『万葉集』の「匂い」のうち、「匂い」が多義的に使われている用例
ウ　「匂い」という言葉の語源を『万葉集』に探る考察
エ　「匂い」という言葉の語源をめぐる考察
オ　「匂い」の語源をめぐる枕詞の研究

問七　この文章の趣旨に合致するものを次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

ア　年をとり、感覚が不思議に鋭敏になってきて、季節の変わり目が気になるようになり、新たにこれまで顧みなかった短歌などへの関心が深まった。
イ　季節の変わり目に人は感じやすくなるようで、「匂い」という言葉に導かれて、人の感受性と言葉の奥深さの共鳴しあう境地に思いが向かった。
ウ　以前からなぜ枕詞があるのかと不思議に思ってきたが、「匂い」という言葉の多義性と枕詞の多義性のうちには関連があることが見えてきた。
エ　「匂い」という言葉の多義性は、日本人というにとどまらず、ヒトの系統発生の過程における嗅覚自身の始原的な多義性と関係していることがわかった。
オ　季節感と「匂い」という感覚の連関を追っていくことで、日本人に独自のいのちの原郷に迫ることができるのではないかと思うようになった。

(二) 次の文章は太宰治の小説「ヴィヨンの妻」の一節で、年の暮れ、夫が小料理屋のツケを踏み倒した上、金を盗んで逃げたことを知った主人公がその小料理屋に向かう場面である。読んで、あとの問いに答えよ。

その池のはたのベンチにいつまでいたって、何のらちのあく事では無し、私はまた坊やを背負って、ぶらぶら吉祥寺の駅のほうへ引返し、にぎやかな露店街を見て廻って、それから、駅で中野行きの切符を買い、何の思慮も計画も無く、謂わば [甲] 、電車に乗って中野で降りて、きのう教えられたとおりの道筋を歩いて行って、あの人たちの小料理屋の前にたどりつきました。

表の戸は、あきませんでしたので、裏へまわって勝手口からはいりました。ご亭主さんはいなくて、おかみさんひとり、お店の掃除をしていました。おかみさんと顔が合ったとたんに私は、自分でも思いがけなかった嘘をすらすらと言いました。

「あの、おばさん、お金は私が綺麗におかえし出来そうですの。今晩か、でなければ、あした、とにかく、はっきり見込みがついたのですから、もうご心配なさらないで」

「おや、まあ、それはどうも」

と言って、おかみさんは、ちょっとうれしそうな顔をしましたが、それでも何か腑に落ちないような不安な影がその顔のどこやらに残っていました。

「おばさん、本当よ。かくじつに、ここへ持って来てくれるひとがあるのよ。それまで私は、[A] になって、ここにずっといる事になっていますの。それなら、安心でしょう？　お金が来るまで、私はお店のお手伝いでもさせていただくわ」

私は坊やを背中からおろし、奥の六畳間にひとりで遊ばせて置いて、くるくると立ち働いて見せました。坊やは、もともとひとり遊びには馴れておりますので、少しも邪魔になりません。

お昼頃、ご亭主がおさかなや野菜の仕入れをして帰って来ました。私は、ご亭主の顔を見るなり、また早口に、おかみさんに言ったのと同様の嘘を申しました。

ご亭主は、きょとんとした顔になって、

「へえ？　しかし、奥さん、お金ってものは、自分の手に、握ってみないうちは、あてにならないものですよ」

と案外、[I] 言いました。

「いいえ、それがね、本当にたしかなのよ。だから、私を信用して、おもて沙汰にするのは、きょう一日待って下さいな。それまで私は、このお店でお手伝いしていますから」

「お金が、かえって来れば、そりゃもう何も」とご亭主は、ひとりごとのように言い、「何せことしも、あと五、六日なのですからね」

「ええ、だから、それだから、あの私は、おや？　お客さんですわよ。いらっしゃいまし」

と私は、店へはいって来た三人連れの職人ふうのお客に向って笑いかけ、それから小声で、

「おばさん、すみません。エプロンを貸して下さいな」

[①]

「や、美人を雇いやがった。こいつあ、凄い」

と客のひとりが言いました。

「[B] しないで下さいよ」とご亭主は、まんざら冗談でもないような口調で言い、「お金のかかっているからだですから」

「百万ドルの名馬か？」

ともうひとりの客は、げびた洒落を言いました。

「名馬も、雌は半値だそうです」

と私は、お酒のお燗をつけながら、負けずに、げびた受けこたえを致しますと、

「けんそんするなよ。これから日本は、馬でも犬でも、男女同権だってさ」と一ばん若いお客が、怒鳴るように言いまして、「ねえさん、おれは惚れた。一目惚れだ。が、しかし、お前は、子持ちだな？」

「いいえ」と奥から、おかみさんは、坊やを抱いて出て来て、「これは、こんど私どもが親戚からもらって来た子ですの。これでもう、やっと私どもにも、あとつぎが出来たというわけですわ」

「金も出来たし」

と客のひとりが、からかいますと、ご亭主はまじめに、

「いろ(注)も出来、借金も出来」と呟き、それから、ふいと語調をかえて、「何にしますか？　よせ鍋でも作りましょうか？」

と客にたずねます。私には、その時、a或る事が一つ、わかりました。やはりそうか、と自分でひとり首肯き、うわべは何気なく、お客にお銚子を運びました。

②

その日は、クリスマスの、前夜祭とかいうのに当っていたようで、そのせいか、お客が絶えること無く、次々と参りまして、私は朝からほとんど何一つ戴いておらなかったのでございますが、胸に思いがいっぱい籠っているためか、おかみさんから何かおあがりと勧められても、いいえ沢山と申しまして、そうしてただもう、くるくると羽衣一まいを纏って舞っているように身軽く立ち働き、C かも知れませぬけれども、その日のお店は異様に活気づいていたようで、私の名前をたずねたり、また握手などを求めたりするお客さんが二人、三人どころではございませんでした。

③

奇蹟はやはり、この世の中にも、ときたま、あらわれるものらしゅうございます。

九時すこし過ぎくらいの頃でございましたでしょうか。クリスマスのお祭りの、紙の三角帽をかぶり、ルパンのように顔の上半分を覆いかくしている黒の仮面をつけた男と、それから三十四、五の痩せ型の綺麗な奥さんと二人連れの客が見えまして、男のひとは、私どもには後向きに、土間の隅の椅子に腰を下しましたが、私はその人がお店にはいってくると直ぐに、誰だか解りました。Ⅱ 夫です。

私は奥で揚物をしているご亭主のところへ行き、

「大谷が帰ってまいりました。会ってやって下さいまし。でも、連れの女のかたに、私のことは黙っていてくださいね。大谷が恥かしい思いをするといけませんから」

「いよいよ、来ましたね」

ご亭主は、私の、あの嘘を半ばは危ぶみながらも、それでもかなり信用していてくれたもののようで、夫が帰ってきたことも、それも私の何か D に依っての事と単純に合点している様子でした。

ご亭主は土間のお客を一わたりざっと見廻し、それから真っ直ぐに夫のいるテーブルに歩み寄って、その綺麗な奥さんと何か二言、三言話を交して、それから三人そろって店から出て行きました。

④

もういいのだ。万事が解決してしまったのだと、なぜだかそう信ぜられて、流石にうれしく、紺絣の着物を着たまだはたち前くらいの若いお客さんの手首を、だしぬけに強く掴んで、

「飲みましょうよ、ね、飲みましょう。クリスマスですもの」

⑤

（太宰治「ヴィヨンの妻」より）

注　いろ……情人、愛人。

問八　空欄 A ～ D に入るもっとも適当な語句をそれぞれ次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

A　ア　捕虜　　イ　飼殺し　　ウ　ボランティア　　エ　預かりもの　　オ　人質
B　ア　誘惑　　イ　揶揄　　ウ　宣伝　　エ　信用　　オ　刺激
C　ア　慢心　　イ　自惚れ　　ウ　これ見よがし　　エ　身のほど知らず　　オ　厚顔無恥
D　ア　さじ加減　　イ　出しゃばり　　ウ　当てずっぽう　　エ　差しがね　　オ　下ごころ

問九　左の枠内の一節は、本文中に入るべき部分である。それはどこか。もっとも適当な場所を次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

> けれども、こうしてどうなるのでしょう。私には何も一つも見当が附いていないのでした。ただ笑って、お客のみだらな冗談にこちらも調子を合せて、更にもっと下品な冗談を言いかえし、客から客へ滑り歩いてお酌して廻って、そうしてそのうちに、自分のこのからだがアイスクリームのように溶けて流れてしまえばいい、などと考えるだけでございました。

ア　①　　イ　②　　ウ　③　　エ　④　　オ　⑤

問十　空欄 甲 には、主人公の一連の行動を形容する言葉が入る。文章全体を読んでもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　なにか魑魅魍魎に取り憑かれたかのように陶然と
イ　飄然として何も考えず心のままに行動しようとして
ウ　おそろしい魔の淵にするすると吸い寄せられるように
エ　勇気と才覚さえあればなんとかなるという気持ちで
オ　道のない深い森にまっすぐに分け入っていくように

問十一　空欄 Ⅰ に入る表現としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　呆れたような、小馬鹿にしたような感じで　　イ　こずるさが、かいま見える調子で
ウ　しずかな、教えさとすような口調で　　エ　驚きと喜びが、ないまぜになった様子で
オ　無感動な、冷静な口ぶりで

問十二　傍線部a「或る事」の内実としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　「ご亭主」も「おかみさん」も自分が客の恋人になればいいと考えていること
イ　「おかみさん」が本当に子供をあとつぎにしようと考えていること
ウ　「ご亭主」が実は自分のした借金を相当苦にしていること
エ　「ご亭主」が本当はあとつぎが欲しいこと
オ　「おかみさん」が自分の夫と関係を持っていたかもしれないこと

問十三　空欄 Ⅱ に入るもっとも適当な語句を次のア～カから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　待望の　　イ　最愛の　　ウ　自堕落な　　エ　どろぼうの　　オ　下司な　　カ　狡猾な

問十四　この文章の内容に合致するものを次のア～カから二つ選び、その解答欄にマークせよ。

ア　作者は、妻としては頼りなくとも母として強くなっていく女性の姿を、感動的な筆致で描き出している。

イ　作者は、夫が引き起こした危機的な状況を、自らの意志で積極的に打破しようとする自立した女性を描いている。

ウ　作者は、小料理屋の新しい働き手としての思わぬ才覚を顕(あらわ)し、次第に自信めいたものを身につけていく女性のさまを描き出している。

エ　作者は、人間関係に戸惑いながらも、良き妻としての役割を果たしていると人に思わせる聡明な女性の姿を描き出している。

オ　作者は、状況に翻弄されながらも事態が奇跡的に好転していくさまを分析的に語る女性を描いている。

カ　作者は、追いつめられてとっさについた嘘が偶然にも真実に転じた人生の皮肉を、一人の女性の視点から生き生きと描いている。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

五月十日余日の程、日ごろ降りつる五月雨の晴間待ち出で、夕日きはやかにさし出でたまふもめづらしきに、ほととぎすさへ伴ひ顔に語らふも、死出の山路の友と思へば、耳とまりて、

をちかへり語らふならばほととぎす死出の山路の [A] ともなれ

とうち思ひつづけられて、こなたざまには人里もなきにやと、はるばる見わたせば、稲葉そよがむ秋風思ひやらるる早苗、青やかに生ひわたりなど、むげに都遠き心地するに、いと古らかなる檜皮屋の棟、遠きより見ゆ。

いかなる人の住みたまふにかと、あはれに目とまりて、やうやう歩み寄りて見れば、築地もところどころ崩れ、門の上などもあばれて、人住むらんとも見えず。ただ寝殿、対、渡殿などやうの屋ども少々、いとことすみたるさまなり。庭の草もいと深くて、光源氏の露分けたまひけむ蓬も所得顔なる中を分けつつ、中門より歩み入れて見れば、南面の庭いと広くて、呉竹植ゑわたし、卯の花垣根など、まことにほととぎす蔭に隠れぬべく、山里めきて見ゆ。前栽むらむらいと多く見ゆれど、まだ咲かぬ夏草の茂み、いとむつかしげなる中に、撫子、長春花ばかりぞ、いと心地よげに、盛りと見ゆる。軒近き若木の桜なども、花盛り思ひやらるる木立、をかし。南面の中二間ばかりは、持仏堂などにやと見えて、紙障子白らかに立てわたしたり。不断香の煙、けぶたきまでに燻り満ちて、名香の香などかうばし。まづ、仏のおはしましけると思ふもいとうれしくて、花籠をひぢに掛け、檜笠を首につらされながら、縁のきはに歩み寄りたれば、寝殿の南、東と、すみ二間ばかり上がりたる御簾のうちに、箏の琴の音ほのぼの聞こゆ。いと心にくく、ゆかしきに、若やかなる女声にて、「いとあはれなる人のさまかな。さほどの年に、いかばかりの心にていと見苦しげなるわざをしたまふぞ。小野小町がひぢに掛けけむ筐よりはめでたし」など言ふ人あり。

「阿私仙(注)に仕へけむ太子の御心よりも、ありがたくこそおぼゆれ」など言ふよりうちはじめ、同じほどなる若き人三四人ばかり、色々の生絹の衣、練貫などいと萎えばみたる着て、縁に出でたり。所のさま、神さび古めかしかりつるほどよりはめやすきさまなめるかなと見る。

「昔の身のありさま、いかなりし人の果てぞ」など、なつかしく問ひ尋ねあへれば、「いとうとましげなるありさまを、をちにて見などもしたまはで。むげに若きほどに、慈悲深くものしたまひけるも、かかる仏の御あたりにものせさせたまふ御ゆゑにやはべらむ」など言いはじめて、「若くての身のありさま、人々しく、そのものなど語りきこえむ、聞きどころありとおぼしめさるべきものにもはべらず。ただ年の積もりには、あはれにも、をかしくも、めづらしくも、さまざまおぼしめされぬべきことを聞きつめてはべりしかども、そも久しくなりてはかばかしくもおぼえねば、いとかひなしや」と聞こゆれば、「それこそは聞かまほしけれ。さてさて、昔より身にありけむことも、聞きつめけむ世のことも、つゆ残らず、この仏の御前にて懺悔したまへ」と言へば、昔語りはげにせまほしくて、花籠、檜笠など縁にうち置きて、高欄に寄りかかりぬ。

(『無名草子』より)

注 阿私仙……法華経の教えを請うために、釈迦(悉達太子)が仕えた仙人。

問十五 空欄 [A] に入るもっとも適当な語句を次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア かたみ　イ こころ　ウ きざし　エ かたり　オ しるべ

問十六 二重傍線部a「に」と文法的に同じ働きのものを、それ以後の二重傍線部b～fから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

問十七　傍線部B「いかばかりの心にて」という疑問に対して、もっとも近い心情を述べているものはどれか。次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。ア～オは、『無名草子』の中の、問題文以外の箇所から抜き出した文である。

ア　人に見えむこともいとどつつましけれど
イ　年月の積もりに添へていよいよ昔は忘れがたく
ウ　後の世に形見にすばかりのことなくてやみなむ悲しさ
エ　浄土もかくこそといよいよそなたにすすむ心も催さるる
オ　いづくにても行きとまらむところに寄り臥しなむと思ひて

問十八　傍線部C「めやすきさまなめるかなと見る」の意味としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　見やすい様子であるかなと、その場の模様を見る。
イ　感じがいいようであると、その女性たちを見る。
ウ　女性らしく美しい様子であると、その女性たちを見る。
エ　見下した様子で感じが悪いと、その場の模様を見る。
オ　非常に簡素な様子であると、その屋敷を見る。

問十九　傍線部D「をちにて見などもしたまはで」の意味としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　こちらで見ることをなさらないで　　イ　近くに立ち寄って見たりなさらないで
ウ　遠くや近くを、よく見ることをなさらないで　　エ　愚かしいと思って、見たりはなさらないで
オ　隔てて遠くで見たりなさらないで

問二十　傍線部E「懺悔したまへ」の敬意の対象としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　小野小町　　イ　仏　　ウ　主人公　　エ　若き人　　オ　太子

問二十一　傍線部F「昔語りはげにせまほしくて」の意味としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

ア　昔の話をゆっくりするには、たいそう狭いので、　　イ　昔を語ることを、たしかに希望されたので、
ウ　昔の話は、たしかに私もしたかったので、　　エ　昔の話を、ぜひしてほしいと思うので、
オ　昔を語るのは、とてもむつかしいので、

〔以　下　余　白〕